

『和漢朗詠集』所収詩句の説話的背景

田中幹子

『和漢朗詠集』の後世への影響は大きく、特に漢詩句は『和漢朗詠集』に選ばれたために著名となり、後世、軍記物語や説話等の文飾として用いられ、さらに定型句のように人口に膾炙したものも多い。本稿ではいくつかの『和漢朗詠集』所収詩句を採り上げ、本説となる故事を日本文学ではどう受容していったかをまとめてみたい。^{*1}

一 「雪中放_レ馬朝尋_レ跡、雲外聞_レ鴻夜射_レ声」(和漢朗詠・將軍・682・羅虬)の「老馬之智」説話の受容

『和漢朗詠集』下巻「將軍」682に羅虬の次の詩句が収められている。

「將軍」

682 雪中放馬朝尋跡 雪の中に馬を放ちて朝に跡を尋ぬ

雲外聞鴻夜射聲 雲の外に鴻を聞いて夜声を射る

羅虬

「管仲は、雪の中で道を失ったが、朝に老馬を放ち、その跡を尋ねて道を知り、更羸は、雲の上に雁の声を聞いて、夜その声をあてに、射落した」という内容である。前半の「雪中放馬朝尋跡」の詩句を本説とした和歌が『後拾遺集』に収められている。

としごろしり侍けるむまきのうれへある事ありて宇治前太政大臣にいひ侍ける頃、雪降りたるあした為中朝臣のもとにいひつかはしける

源兼俊母

たづねつる雪のあしたのはなれごま君ばかりこそあとをしるらめ

(後拾遺集・雑三・989)

雪の朝に放れてしまった馬の跡を探すという内容であり、「雪中放馬朝尋跡」の詩句が本説であると『奥義抄』で指摘されている。

たづねつる雪のあしたのはなれごま君ばかりこそあとをしるらめ

雪中放馬朝尋跡といふ詩の心なり。

(奥義抄・中巻・後拾遺・二十雪の朝あしたの駒^{*2})

この註文には『和漢朗詠集』の書名が挙げられていないが、『和歌童蒙抄』『奥義抄』等院政期歌学書が註文で典拠名を伏せ詩句を引く場合、典拠としていたのは『和漢朗詠集』であった。^{*3}また、この和歌は「雪中放馬朝尋跡」の詩句と同様に『新撰朗詠集』でも「將軍」の項目に収められていた。(新撰朗詠集・雑・將軍・五句「跡は知らめ」^{*4})。

このように、「雪中放馬朝尋跡」の詩句を「たづねつる雪のあしたのはなれごま君ばかりこそあとをしるらめ」の本説として受容されて行く様子が窺える。ところで「雪中放馬朝尋跡」という詩句は、『和漢朗詠私注』以後の古注釈では、『韓非子』の「老馬之智」説話を本説とするとみなされている。「老馬之智」説話とは次のような内容である。

管仲、隰明従^レ於桓公^一而伐^レ孤竹^一、春往冬反迷惑失^レ道、管仲曰、老馬之智可^レ用也。乃放老馬^一而隨^レ之、遂得^レ道。

管仲・隰明、桓公に従って孤竹を伐ち、春往きて冬反る。迷惑して道を失ふ。管仲曰く、老馬の智用ふ可し、と。乃ち老馬を放ちて之に随ひ、遂に道を得たり
(韓非子・説林上^{*5}・第二十二^{*6})

管仲が桓公に従って孤竹を伐ち、出発したのは春であったが、還る時は冬になっていたため、帰り道を見失って

しまった。その時、管仲が老馬を放つてそれに随うことで、帰り道を見出したという内容である。『千載佳句』「將軍」に「雪中放馬朝尋跡」の詩句が所収された際には「羅虬和扶風老人詩」という脚注がある。『全唐詩』にこの詩は見えず、羅虬の詩の全体像はわからないが、『和漢朗詠集』古注釈では『韓非子』所収「老馬之智」説話を本説とするという指摘がなされてきた。例えば、院政期成立の『和漢朗詠私注』でも「老馬之智」説話とこの詩句の関係が指摘されている。

重和「扶風老人洛洛」。曰。韓子云、管仲事齊桓公為上卿。桓公北征孤竹。

大雪迷而失路。仲曰、老馬之智可用也。於是放老馬隨跡返本国。

(東大本和漢朗詠集私注)

ところで『和漢朗詠私注』では、「大雪迷而失路」とあるように、管仲が道に迷った理由を「大雪」の為としている。また、羅虬の詩句では「雪中放馬朝尋跡」と、やはり馬を「雪中」に放している。さらに、この詩句を本説とした「たづねつる雪のあしたのはなれごま」歌も「雪」の中に馬を放したという内容である。しかし「老馬之智」説話は、原典である『韓非子』の他、『芸文類聚』(巻九三・獸部上・馬)等の類書、及び真福寺本古注『蒙求』「管仲隨馬」もほぼ同文「春往冬反迷惑失道」であり、格別「雪の為」とはしていない。「老馬之智」説話で「雪によって迷う」とするようになったのは、寛弘四(一〇〇七)年成立の『世俗諺文』である。

老馬智

韓子云。管仲字夷吾。事_二齊桓公_一為_二上卿_一也。時桓公北征_二孤竹_一。山行值_レ雪迷失_レ路。於是軍衆莫_レ知。管仲曰。可_レ用_二老馬於前_一。而後隨_レ之。遂_二馬於道_一而歸。

『世俗諺文』は源為憲が十九歳の藤原頼通のために、当時の教養として必要だと判断した有名漢故事を集めた書である。この書に収められている説話で直接書承関係にあるものは見れず、故に「山行値_レ雪迷失_レ路」も文献上これ以上遡ることができない。むしろ延長三（九二五）年頃に成立した『千載佳句』に収められた羅虬の「雪中放_レ馬朝尋_レ跡」の詩句に合わせて「山行値_レ雪迷失_レ路」という表現が生まれた可能性もある。

しかし、「老馬之智」説話の受容という問題において、道に迷った原因はさして重要ではなかったと思われるのである。というのは、「老馬之智」説話を本説とする和歌で最も著名な『後撰集』の歌が、道に迷う理由を「夕闇」としているからである。

思ひ忘れにける人の許にまかりて

夕闇は道もみえねど古さとはもとこし駒に任せてぞくる

（後撰集・恋五・978・詠人不知）

この和歌は、『俊頼髓脳』『綺語抄』『奥義抄』『和歌童蒙抄』等、ほとんどすべての歌学書に引かれ、その註文にこの和歌の本説が「老馬之智」説話であることを示している。一例として、藤原範兼著『和歌童蒙抄』を引用した

い。

夕去れば道も見えねどわれはただもとこし駒に任せてぞゆく

駒にまかすとは、韓子曰、恒公伐孤竹。春行て秋帰る。まどひて道を失ふ。管仲曰、老馬の智もちるべし。即馬を放て従ひて帰ぬと云々。
(和歌童蒙抄・第九・獸部・馬)

院政期の漢学者である範兼は、『和歌童蒙抄』に膨大な漢籍を引用するが、そのほとんどが類書からの孫引きである。^{*7}ここでの「韓子曰、云々」も『芸文類聚』等からの記事と思われる。しかし、ここで範兼は、「夕去れば道も見えねど」と「夕闇」によつて道に迷うという和歌に対し、「春行て秋帰る。まどひて道を失ふ」と注することに疑問を感じていない。この他、『奥義抄』でも「夕闇」で迷う歌に対し、「大雪」で迷う注をつけている。

ゆふやみはみちもみえねどふるさとはもとこしまにまかせてぞくる

老馬知道といふ事のある也。むかし齊の管仲大雪にあひて道をまどへるに、馬にまかせてゆきたること也。

裏書云、韓子曰、管仲事齊桓公、為上身。桓公北征孤竹國。于時大雪、人皆失路。仲曰、可用老馬智。於是放老馬隨其路得帰本國。見蒙求。(奥義抄・中卷・後撰歌・三十一駒にまかせてゆく)

これらから、「老馬之智」説話の日本における受容で、重要なのは、道に迷う理由ではなく、馬に任せて行くこ

とにあるのがわかる。迷う理由ではないことが窺われる。

ところが、作品を重ねて行くに従い、肝心の馬に任せて行くという形すら崩れていく。羅虬の詩句「雪中放馬朝尋跡」は、『和漢朗詠集』古注釈において、「老馬之智」説話を本説とすることが指摘されていた。さらに『奥義抄』において、この詩句を本説として詠まれたと指摘されたのが、「たづねつる雪のあしたのはなれごま君ばかりこそあとをしるらめ」歌であった。しかし、ここでは「放れ駒」となっており、肝心の馬に任せて行くということを受容していない。「放れ駒」とは、羅虬詩句の「放馬」に該当する表現であるが、これでは馬が自ら逃げたことになり、「老馬之智」の漢故事で、馬をわざわざ放ったという意図とはまったく別なものになってしまう。この和歌の作者である源兼俊母は、『和漢朗詠集』の「雪中放馬朝尋跡」は確かに意識していたが、この詩が『韓非子』の「老馬之智」に遡るとは知らなかったのかもしれない。

羅虬の詩では、上の句「雪中放馬朝尋跡」が「老馬之智」説話を踏まえ、下の句「雲外聞鴻夜射声」は『戦国策』巻第五「天下合従」の、手負いの雁が、弓を引く音に驚いて落ちたという説話を踏まえている。ところが、この説話と詩句とを較べてみると、「雲外聞鴻夜射声」の句では、鴻の声を雲のあなたに聞いて、その声だけをたよりに弓を引く真似でなく、実際に弓を引いてこれを射落したと解釈されている。その上、原典にはない要素も持ち込んでいる。時間設定である。時間は「夜」である。漢詩の世界で考えるならば、声を頼りに矢を放つのだから、日中では、声が出たとたん、鴻の姿が見えてしまうことになり、弓矢の技術の自慢にはならない。「夜」であつてこそ「声はすれども姿は見えず」の中にあつて射落とすという自慢になるので、「夜」という時間設定を加えたのは当然であろう。

この詩句は、『韓非子』の「老馬之智」と『戦国策』のこの説話を背景にした句が対句の形になっている。対句のうち一方を、「夜」ならば、それに対応するのは「朝」である。そのため、「老馬之智」の「雪中放馬朝尋跡」の方も、馬の跡を追うのが「朝」という、原典にない時間の要素を持ち込んだのであろう。「朝」と「夜」だけではなく、上句と下句は「雪中」に対し「雲外」、「馬」に対し「鴻」、「尋」に対し「聞」、「放」に対し「射」と、すべて対句になっている。原典の漢故事に忠実であろうとすることよりも、文学性の高い詩をつくらうという芸術的欲求の方が強く、そのため原典の漢籍を変容させたのではないだろうか。

また「たづねつる雪のあしたのはなれごま君ばかりこそあとをしるらめ」の歌を「雪中放馬朝尋跡」の詩句と比較すると、「たづねつる」が「尋」、「雪の朝」が「雪中」「朝」、「放れ駒」が「放馬」と一語一語が対応するのだが「馬を放つ」詩句に対し「馬が放れる」和歌となっていた。

以上、羅虬の「雪中放馬朝尋跡」詩句、源兼俊母の「たづねつる」歌の用例から、説話内容にほとんど拘束されず、対句の整合性の美を追究し、自己の立場主張を訴えるために、「老馬之智」説話を自由に変容させ利用している様子が窺える。

「馬に任せて行く」内容だった「老馬之智」説話を大きく変容させた「放れ駒」歌を、藤原基俊は『新撰朗詠集』の「將軍」に収めた。基俊の脳裏に「放れ駒」の歌と、『和漢朗詠集』の羅虬の「雪中放馬朝尋跡」の詩句を結び付けようという意識が働いたと思われる。両者の関係は、先に引用した通り、直前の成立の『奥義抄』にも指摘されていた。基俊や清輔の意識としては、「放れ駒」を詠んだ「たづねつる」の歌をあえて、「老馬之智」説話と結び付ける意図はなかったらう。これに対して、公任や『千載佳句』の編者大江維時は、「老馬之智」を用いた管仲

將軍の知略を重視し、羅虬の「雪中放馬朝尋跡」詩句を「將軍」項目に入れたのであろう。

二 「翅似得群棲浦鶴、心応乗興棹舟人」(和漢朗詠・雪・378・村上天皇御製)の「子猷尋戴」説話の受容

前章では「老馬之智」説話を受容した『和漢朗詠集』所収の羅虬の詩句、さらに日本においてどう受容したかという変遷を、『新撰朗詠集』所収の「たづねつる」歌を中心に考察してきた。次に、「子猷尋戴」説話の受容を『和漢朗詠集』「雪」項目所収村上天皇御製の詩句で考えてみたい。

〔雪〕

378 翅似得群棲浦鶴

翅つばさは群を得たるに似たり 浦すに栖すむ鶴

心応乗興棹舟人

心こゝろは応まさに興に乗るべし 舟に棹ささす人

村上天皇御製

「雪が池に降り積もると、池に棲む鶴は、積もった雪を多くの鶴の仲間がふえたと思ひ誤り、また、その池の水に舟を棹ささしている人は、雪のために興に乗じて舟を進めているようだ。」という内容のこの詩句は、出典は明らかではないが『和漢朗詠私注』に「池辺初雪」とあることから、柿村重松氏は、『日本紀略』に「村上天皇応和元(九六一)年十一月九日己巳、今日、御製、池辺初雪」とある記事の詩の一節であろうと考証されている。^{*}このうち下の句「心

「應^レ乘^レ輿^レ棹^レ舟人」は、『蒙求』の標題である「子猷尋戴」の故事を踏まえている。雪明かりの晩、王子猷という人物が興のままに友の戴安道に逢いに舟で出かけたが、門前まで着きながら、突然「興が尽きた」と結局逢わずに帰ったという。以下、この故事を「子猷尋戴」説話と称し、論をすすめていきたい。「子猷尋戴」説話は、公任の時代に使用されていた古註『蒙求』から引用することにする。

子猷尋戴 世説、王子猷、居^二山陰而隱^一、夜大雪、眠覺開^二屋室^一酌^レ酒、四望皎然、因起仿徨、詠^二左思招隱詩^一、忽憶^二戴安道^一、時戴在^二剡縣^一、便乘^二一小船^一、經^レ宿方至、造^レ門不^レ前返、人問^二其故^一也、王曰、乘^レ輿而返、何必見^レ戴也

世説、王子猷、山陰に隠れ居りし時、夜、大雪し、眠り覚めて屋室を開き、酒を酌し、四望皓然たり。因って起き仿徨し、左思の招隱の詩を詠じ、忽ち戴安道を憶ふ。時に戴は剡縣に在り。便ち一小船に乗り、宿を経て方に至る。門に造りて前^{まへ}まずして反^{かへ}る。人、其の故を問ふ。王曰く、輿に乗じて返る。何ぞ必ずしも戴を見んや。

(宮内庁書陵部蔵上巻影鈔本蒙求)

引用文中の「世説」とは、『世説新語』を指す。この書は、『日本国見在書目録』「小説家」に記載されており、早くからわが国でも受容されてきた書物である。『世説新語』は、後漢から東晋の代表的人物の逸事瑣語を気の利いた短文形式で表したもので、『隋書經籍志』にも小説の項に記載が見られる。この『世説新語』の「任誕篇」に、

ほぼ同様の記事が見られる。

王子猷居_二山陰_一、夜大雪、眠覺、開_レ室命_二酌酒_一、四望皎然。因起彷徨、詠_二左思招隱詩_一、忽憶_二安道_一。時戴在_レ剡、便乘_二小船_一就_レ之。經_レ宿方至、造_レ門不_レ前返。人問_二其故_一、王曰吾本乘_レ興而返、何必見_レ戴。

(隋書經籍志)

子猷が山陰に居た時、夜大雪が降った。眠りから覚めて、部屋の戸を開け、酒を酌ませたが、あたりは一面の銀世界である。そこで立ち上がってあたりをさまよいながら左思の招隱詩を詠じ、ふと戴安道のことを憶い出した。当時、戴安道は剡にいたので、さっそく夜小船に乗って彼のもとへ出かけ、一晚かかってやっと到着した。門まで来ると内に入らず引き返した。ある人がわけをたずねると王子猷はいった。「私はもともと興に乗って出かけ、興が尽きるとともに帰ってきたのだ。なにも戴に会わねばならぬこともあるまい。」

(世説新語・任誕篇・第二十三)

『世説新語』には劉孝標の注が付いている。

中興書曰、徽之卓犖不羈、欲_レ爲_二傲達_一、放肆聲色頗過度。時人欽_二其才_一、穢_二其行_一也。

この説話に対し、『中興書』は王子猷のことを「卓犖不羈、欲爲傲達」つまり、気ままに放逸と評している。「子猷尋戴」説話は、『世説新語』「任誕篇」という章に収められていた。これは世俗を気にせぬ自由な生き方、態度を意味している。この他、『世説新語』所収の王子猷説話は十数話にのぼり、「任誕篇」の他、更に激しく拘束されることを拒絶している「簡傲篇」に収められている。そこに描かれている王子猷は自由で奔放、豪胆な人物であり、意に染まない事は平然と怠り、己れの精神の自由は誰にも犯させぬという気迫が感じとれる。「子猷尋戴」説話も、夜、戴安道の家の前まで来ながら、結局逢わずに帰り、その理由を尋ねた人に対し、「吾れ本より興に乗じて行き、興尽きて返る。何ぞ必ずしも戴を見んや。」（私はもともと興に乗って出かけ、興が尽きるとともに帰ってきたのだ。なにも戴に会わねばならぬこともあるまい。）と言いつつ子猷は、ある意味では傲岸不遜とさえ映る。「子猷尋戴」を四字表題として掲げた『蒙求』でも、不羈奔放、豪胆な人物の物語としてこの説話を位置付けていることが窺える。『蒙求』は本文が対句形式になっている。「子猷尋戴」と対になっているのは、同じ『世説』を典拠とする「呂安題鳳」という説話である。

呂安題鳳 世説、呂安字仲悌、與嵇康友善、嘗詣康不在、康兄喜出、苦迎之、不入、題門上作鳳字而去、喜不覺、猶以為欣、鳳字凡鳥也
 （宮内庁書陵部蔵上巻影鈔本蒙求）

呂安題鳳 世説、呂安字仲悌、嵇康と友善する。嘗て康を詣づれど在らず。康の兄喜出で、苦に之を迎ふ。入らずして、門上に題して、鳳の字を作りて去る。喜、覺ず、猶以て欣びとなす。鳳の字は、凡鳥なり。

呂安が親友嵇康を訪ねていったが、嵇康は不在であり、代わって嵇康の兄嵇喜が鄭重に迎えた。しかし、呂安は家に入らず、門の上に「鳳」の文字を書いて去った。喜は、本当の意味には気づかず、呂安が自分に好感を持ったと思った。実は、呂安が書き残した「鳳」の文字は、嵇喜を「凡」と「鳥」つまり「凡人」と評したものであった。

『蒙求』の対句は、事を類している内容なので、『蒙求』編者李瀚が二つの故事に共通性を感じていたことがわかる。たとえば親友の兄であろうとも、感性の鈍い者に対しては、無視し軽蔑したという辛辣な呂安の故事と対句させたのである。このことから編者李瀚は、友人宅の門前で引き返した理由を問うた人に「自分は興のままにきたのだ。その興が尽きた今、なぜ戴安道に逢う必要があるのか」と言い放った子猷の言葉を、勘の鈍い人への罵倒と解釈したことがわかる。

しかし、「池辺初雪」という題で「心応^レ乗^レ興棹^レ舟人」（和漢朗詠・雪・378）と詠んだ村上天皇の脳裏には、豪胆で不遜な王子猷ではなく、花鳥風月を愛す風雅な王子猷像が浮かんだと思われる。

その一例として、平安末、藤原成範著とされる『唐物語』第一話を引用したい。

むかし王子猷山陰といふ所にすみけり。世中のわたらひにほだされずして、たゞ春の花秋の月にのみ心をすましつゝ、おほくのとしつきを、くりけり。ことにふれてなさけふかき人なりければ、かき曇ふる雪初て晴、月のひかりきよくすさまじきよ、ひとりおきゐてなぐさめがたくやおぼえけん、たかせぶねにさほさしつゝ、心にまかせて、戴安道をたづねゆくに、みちの程はるかにてよもあけつきもかたぶきぬるを、ほいならずやおもひけむ、かくともいはでかどのもとよりたちかへりけるを、いかにと、ふひとありければ、答て云月面白ければ

月に乗てあくかれ出ぬ月入ぬれば吾又帰ざらめやと云て

もろともにつきみんとこそいそぎつれかならず人にはあはむものは

てつひにかへりぬ。心のすきたる程はこれにておもひしるべし。戴安道は剡県といふ所にすみけり。この人のとしごろのとも也。おなじさまに心をすましたる人にてなん侍ける。

(唐物語・第一話)

「世中のわたらひにほだされずして、たゞ春の花秋の月にのみ心をすましつゝ、おほくのとしつきを、くりけり。」という王子猷の姿は、花鳥風月を愛し、俗世を離れた、恬淡とした隠遁者の姿である。このような王子猷の姿は『唐物語』だけではなく、この故事を翻案した『蒙求和歌』（国会図書館本）の「晋ノ王義之カ第四子王子猷載安道トハ多年ノトモナリ琴詩酒ノアソヒニハムシロヲヒトツニシ雪月花ノナカメニソテヲツラネス」をはじめ、『蒙求抄』、『歌林良材集』、『ささめごと』等、ほとんどの作品に共通する。『蒙求抄』では「風雅集二帰歟」、『歌林良材集』では「誠ニ深情ナルベシ」、『ささめごと』では「情けふかく覚え侍れ」と王子猷のこの行動を受けとめている。

また、『十訓抄』では「子猷は雪の夜月にあくがれてはるかに剡縣の安道を尋ね」、『浜松中納言物語』では「そのころ二位の中納言、昔この所に住みけるわうしゆといふ人の、月のあか、りける夜、船に乗りつゝ、遊びし文作りける所に」、『無名草子』でも「ただこの月に向かひてのみこそあれ。されば王子猷は戴安道をたづね」とあるように、優美な文飾としても用いられている。その際、特に注目したいのは、王子猷の「興」が起きる原因を「月光」としていることである。月に興を催したとする用例は古くから見られ、『懐風藻』にも次のような一節がある。

在_二常陸_一贈_二倭判官_一留在_二京_一 並序

無由何見李將郭 由も無ければいかにかあはむ李と郭と

有別何逢達與猷 別れあればいかにか逢はむ達と猷と

馳心悵望白雲天 心を馳せてながむ白雲の天

寄語徘徊明月前 語を寄せて徘徊する明月の前

(懷風藻・89)

ここで故事の背景に登場するのは「月」であって、「雪」ではない。菅原道真も「月」という題で「子猷尋戴」説話を詠んでいる。

新月二十韻

百城秋至後 百城 秋至りて後

三諫月成初 三諫 月成る初め

略

庾令登樓嬾 庾令 樓に登るに嬾し

王生命駕徐 王生 駕を命すること徐からむ

(菅家文章・193)

ここでも「王徽之も乗物を用意させることに急がない。満月ならば居ても立っても居られないで出かけるが、新

月だから別にあわてない」と「子猷尋戴」の故事を「月」を詠む詩の典拠として使っている。ここには「雪」の要素はまったく見られない。

十世紀に入っても、「月」を「子猷尋戴」の重要要素として詠んでいる用例がいくつも見られる。たとえば『類聚句題抄』の大江以言の「秋思入江山」題の「乗輿棹舟応正到」「商領雲中素月眉」や儀同三司の「不飽未飽風月思」題(42)の「逢友応求出霧陰」である。このうち「疑」項目の源順の「月光疑夜雪」題(46)は「月の光を夜の雪と見まちがえる」というものである。むしろ「雪」よりも「月」が主眼になっている。

和歌には「月」に興じる用例が多く見られる。『唐物語』では、「月面白ければ月に乗てあくがれ出ぬ。月入ぬれば吾又帰ざらめや」という子猷の発言と、「もろともにつきみんとこそいそぎつれかならず人にあはむものかは」の和歌は、『蒙求和歌』の「雪月ノ興ニノリテキタリキ興ツキテカヘリヌナム」「ナニカマタアハテカヘルトヲモフヘキ月ト雪トハトモナラヌカハ」や、『堀河百首』「月」所収の藤原仲実の和歌「もろともにみる人なしにゆきかへり月にさをさすふなぢなりけり」(791)を踏まえていると指摘されている。そして、この歌は、『和歌色葉』に「月にさをさす」という題で採られている。

もろともにみる人なしにゆきかへり月にさをさすふなぢなりけり

この歌の心は、王子猷、戴安道は月を愛する友也。雪夜、王子猷家を出でて見るに四方如明月なりければ、樟小船爲尋戴安道到剡縣。然而不尋王子猷還。人問其故。雪月の興によりて来れり。然るに月入雪消ぬ。依て還る也。何心してか戴安道に遇むやといへりけり。この歌はその心をよめり。

(和歌色葉・下巻・類聚百首・二十六月にさをさす)

あたかも大事なのは「月」のみといわんばかりである。これらの「雪月の興」という表現こそ、日本文学における「子猷尋戴」説話受容の基調と見てよいと思われる。

「子猷尋戴」説話に月が現れる源泉は、『晋書』の「夜雪初霽、月色清朗」の記事である。

〔前略〕嘗居山陰、夜雪初霽、月色清朗、四望皓然、独酌酒詠左思招隱詩、忽憶戴逵、逵時在剡、便夜乘小船詣之、經宿方至、造門不前而反、人問其故、徽之曰、本乘興而來興盡而反何必見安道邪

(晋書・列伝・第五十)

清水浜臣が『唐物語提要』で、『唐物語』の典拠を『晋書』としたのも、「夜雪初霽、月色清朗」の語句が「かき曇る雪初て晴、月のひかりきよく」に該当すると判断したためであろう。しかし『晋書』の「夜雪初霽、月色清朗」は、新注『蒙求』まで見あたらない。但し、『世説新語』や『蒙求』が豪胆な人物の説話として伝えた「子猷尋戴」説話を、花鳥風月を愛する粹人の話と変容させたのは、日本人が最初ではない。既に李白が優美な王子猷を詠んでいる。

秋山寄衛尉張卿及王徵君

『和漢朗詠集』所収詩句の説話的背景

何以折相贈 白花青桂枝 何を以て 折って相ひ贈らむ 白花青桂の枝

月華若夜雪 見此令人思 月華 夜雪の若く これを見れば 人をして思はしむ

雖然剡溪興 不異山陰時 然かくして剡溪の興と雖も 山陰の時に異ならず

明發懷二子 空吟招隱詩 明發 二子を懷はば 空しく吟ぜむ招隱の詩

(李太白集・卷十二)

李白は、この他にも多く「子猷尋戴」説話を詩に詠んでいる。もう一例引用したい。

留別広陵諸公

乘興或復起 興に乗じて 或は復た起ち

棹歌溪中船 棹歌す 溪中の船

(李太白集・卷十四)

白楽天もまた、次のように「子猷尋戴」説話を詠んでいる。

長齋月満、携酒先與夢得对酌、醉中同赴令公之宴、戲贈夢得

齋公前日満三旬 齋公前日三旬に満つ

酒榼今朝一払塵 酒榼今朝一たび塵を払ふ

乘興還同訪戴客

興に乗じて還た戴を訪ふ客に同じ

解醒仍対姓劉人

醒を解き仍ほ劉を姓とする人に対す

(白氏文集・3288)

三十日間の長齋の期限が満ちたので、今朝は酒樽の塵を払って飲んだ。因って王子猷のように、興に乗じて共に斐公を訪れ、劉令と同じ姓の夢得と対酌して宿醒を醒ますという内容である。李白の「乘興或復起」、白樂天の「乘興還同訪戴客」の「乘興」という表現に注目したい。「子猷尋戴」説話を「乘興」つまり「面白さにまかせて」と捉えている。このような受容姿勢は、『初学記』の「雪」題の事対にも見られる。見出し語が「乘興」となっているのである。

『初学記』卷二雪第二「映雪 乘興」

語林曰。王子猷居山陰。大雪。夜開室命酌。四望皎然。因詠招隱詩。忽憶載安道。時在剡。乘興棹舟。經宿方至。既造門而返。或問之。対曰。乘興而來。興盡而返。何必見載。

日本における「子猷尋戴」説話受容も、『世説新語』や『晋書』からではなく、『蒙求』を始め『芸文類聚』『初学記』『事類賦』『太平御覧』等の類書によって受容されやすい状態にあった。これら類書は、ほぼ同様の内容であり、そこに月の光の記事はない。しかし「子猷尋戴」説話受容では「乘興」という点が重要であり、その原因は二次的な問題だったのでないだろうか。この状況は、前章の「老馬之智」説話の原因に「大雪」の要素が付加され、

「夕闇」によつて迷う説話に変容されて行く過程と同じである。

院政期を迎えると、「子猷尋戴」説話が「月」と結び付いて行く傾向はいつそう強まる。

『中右記部類紙背漢詩集』から引用したい。

某年某月某日「雪裏勸盃酒」通家左京大夫

屢酌「蘭樽」花白処類傾「桂醕」月寒程 誰尋「剡峴」入「郷思」 豈訪袁門論戸情。

(中右記部類紙背漢詩集・卷第七・30)

この詩会と天永二(一一一一)年の詩会は、題や場面に共通性が見られる。両者の内容を見ていくと、永久元年と五年の詩会では一七首中七首、天永二年の詩会では一九首中八首が「子猷尋戴」の故事を使っている。つまり、「雪」の題が与えられた時、詩人達はまず「子猷尋戴」故事を思い出し、それから「月」が附随的に、或いは、月の光に雪が浮かぶという場面を詠むことが慣習となり、やがては「雪」を離れ、「月」のみで「興」を催す説話として受容されたと思われる。特に日本においては、「感興」が起きる最も一般的な対象であった「月」と、この説話が結びつき易かったのではないかと想像される。

これは伝える側の問題ではなく受容する側の問題である。つまり「子猷尋戴」の故事を風雅の話として受容した際、受容する側の心に「月」が無意識のうちに用意されて存在していたためではないだろうか。深夜、あたり一面が白く輝いて、感興を催す原因は、本文では「雪」であっても、故事を受容する側の意識の上では「月」を附加し

て受容し、特に日本文学では、どちらかといえばむしろ月の方に重要性を感じ受容していったように思われる。

三 「詞託」微波「雖」且遣 心期「片月」欲為「媒」(和漢朗詠・七夕・217・菅原輔昭)の「破鏡」説話受容について

前章までにとりあげた「雪中放_レ馬朝尋_レ跡、雲外聞_レ鴻夜射_レ声」(和漢朗詠・將軍・683・羅虬)と「翹似_レ得_レ群棲_レ浦鶴、心應_レ乘_レ興棹_レ舟人」(和漢朗詠・雪・378・村上天皇御製)とは、おのおの「老馬之智」説話と「子猷尋戴」説話を本説とすることが従来から指摘されてきた。

本章では、まだ漢故事との関連を指摘されていない本朝詩句について私見を述べたい。次に引用する菅原輔昭の詩句は、『和漢朗詠集』「七夕」項目に収められている。

「七夕」

217 詞託微波雖且遣 詞は微波に託_つけてかつかつ遣_やるといへども

心期片月欲為媒 心は片月を期_なして媒とせん_なとす

輔昭

輔昭が織女に成り代わり、牽牛との再会を待ちわびる気持ちを詠んだ詩句である。この詩句の原典は未詳であるが、『和漢朗詠私注』には「代_レ牛女_レ待_レ夜」という題が注されている。このうち「心期_二片月_一欲_レ為_レ媒」という詩

句は、片割れ月が逢瀬の仲立ちとなるというものである。本章では、片割れ月、つまり半月が二星の仲立ちになるという発想の背景に「破鏡」説話があることを考察していきたい。「破鏡」説話とは、『神異経』にある次のようなものである。

神異経曰、昔有_二夫婦_一、将_レ別破_レ鏡、人執_レ半以為_レ信、其妻与_レ人通、其鏡化_レ鵲飛至_二夫前_一、其夫乃知_レ之、後人因鑄_レ鏡為_レ鏡、安_二背上_一自_レ此始也。

(神異経)

夫婦が離れ離れになってしまう時、鏡を半分に割って互いに身につける風習があった。その妻に他の男性が通おうとした際、鏡は鵲に変化して、夫のところに飛んで行き、夫にそれを知らせた。以来、鏡の裏には鵲を鑄するようになった、というものである。また、鵲は七夕には欠かせない鳥であった。というのは、七夕の夜、織女は鵲によつて牽牛に再会するからである。『歳華紀麗』や『白氏六帖』に、鵲が天の川に身を埋め、翼を広げて橋を作り、織女を向こう岸へ渡すという記事がある。

『歳華紀麗』卷三「七夕」

鵲橋已成、織姫将_レ渡

風俗通云、織女七夕、当_レ渡_レ河、使_レ鵲為_レ橋。

『白氏六帖』「鵲部」

淮南子 烏鵲填_レ河成_レ橋、渡_二織女_一

また、平安人が多く利用した『李嶠百詠』にも、「鵲の橋」が詠まれている。

橋

烏鵲填応満　　烏鵲填めて　　まさに満つべし

黄公去不帰　　黄公去りて　　帰らず

鵲

危巢畏風急　　巢を危くして　　風の急なることを畏れ

遶樹覚星稀　　樹を遶りて　　星の稀なることを覚る

喜逐行人至　　喜ぶらくは　　行人を逐ひて至ることを

愁随織姫帰　　愁ふらくは　　織姫に随ひて帰ることを

儻遊明鏡裏　　儻し　　明鏡の裏に遊ばば

朝夕生光暉　　朝夕に　　光暉を生さむ

(李嶠百詠)

(李嶠百詠)

「烏鵲填めてまさに満つべし」(橋)や「愁ひて織姫に随ひて帰る」(鵲)の詩句が「七夕」伝説の「鵲の橋」を表現している。そして同じ「鵲」項目に「儻し　明鏡の裏に遊ばば、朝夕に　光暉を生さむ」という表現がある。この詩句は、先に引用した半分の鏡が鵲に変化したという「破鏡」説話を踏まえている。

『李嶠百詠』には「月」部にも「破鏡」説話の表現が見られ、実際の月を詠む際にも「破鏡」は使われたことが窺われる。

月

分暉度鵲鏡 暉ひかりを分わかちては 鵲鏡じやくきやう 度わたる
流影入蛾眉 影を流しては 蛾眉に 入る

(李嶠百詠)

「分暉度鵲鏡」が「破鏡」説話に因んだ表現である。「暉ひかりを分わかちて」は、半月を意味する。日本の月の詩にも「破鏡」の表現が用いられている。

織月賦せんげつ

源英明

飛鵲猶慵 喘牛何在 飛鵲猶ものうほ慵もし 喘牛ぜんぎう何いくにか在る
疎於破鏡之姿 寧見如珪之彩 破鏡の姿より疎いづにして 寧いづんぞ珪の如きの彩を見む

(本朝文粹・卷一・2)

「織月」とは細い月のことである。「飛鵲猶慵、喘牛何在」とは、『初学記』「月」の「事対」にある「吳牛喘、魏鵲飛」を踏まえた表現である。「飛鵲猶慵」とは『初学記』の「魏鵲飛」に基づくが、この「魏鵲飛」とは魏の武

帝の「短歌行」のうち「鵲」と「月」が詠まれている部分「月明星稀、烏鵲南飛。繞樹三匝、何枝可_レ依」の月が明るいために星はよく見え、月明りの中を鵲が飛んできて、樹を繞るといふ詩句を示している。「飛鵲猶_レ慵」とは、月が満月でないので、鵲は止るべき枝がなく慵いという内容である。因みに対になっている「喘牛何在」とは、『初学記』の「吳牛喘」を踏まえ、満月には喘ぐ牛も、今は何処にいるかわからないと詠んだものである。

「短歌行」の「月」は半月ではなく満月であるが、「月」と「鵲」の組み合わせは、やはり「破鏡」説話の受容として捉えるべきであろう。先に引いた『李嶠百詠』「鵲」の「樹を繞りて 星の稀なることを覚る」もこの魏の武帝の「短歌行」を受けた表現である。「疎_二於破鏡之姿_一、寧見_二如珪之彩_一」の詩句も『李嶠百詠』の「分_レ暉度_二鵲鏡_一」に基づく表現である。このように「破鏡」説話が、平安人に知られ、「月」の題で漢詩を詠作する際、文飾として用いられるようになった。ここで、改めて章の最初に掲げた『和漢朗詠集』の菅原輔昭の詩句を見ていきたい。

「七夕」

217 詞託微波雖且遣

詞は微波に託_つけてかつかつ遣_やるといへども

心期片月欲為媒

心は片月を期_なして媒_なとせんとす

輔昭

「織女は天の川の岸まで来たけれど、日がまだ暮れず逢う時間でもないので、川のさざ波に託してわが思いを言いやるけれど、夜に入り片割れ月の出るのを待って、これを仲立に逢おうと心では願っている」という内容である。七月七日は、月齢からもともと半月であり、これを「片割れ月」と表現するところに「破鏡」説話に基づく『李嶠

百詠』「月」の「分暉度鵲鏡」という表現や、「破鏡」説話自体を想像させる。「片月」が鵲ならば、「片月」つまり鵲が媒とするという発想は、まさしく月が「鵲の橋」となって二星を結び付けることを想定した表現であろう。「破鏡」説話と、「七夕」伝説の「鵲の橋」が結びついている例は、『新撰朗詠集』「七夕」に採られている菅忠貞の詩題にも見られる。

似告前行臨浪夕

前行に告ぐるに似たり浪に臨む夕

欲迷帰路隠雲秋

帰路に迷ひなむと欲す雲に隠るる秋

(新撰朗詠集・七夕・199・月為「渡河媒」・菅忠貞)

詩題の「月は渡河の媒と為す」という表現は、輔昭の「心期「片月」欲_レ為_レ媒」詩句と同じである。これも、七日の月だから半月、半月であるため「破鏡」説話の「飛鵲」と結び付き、鵲といえは「七夕」の「鵲の橋」、だから二星の逢瀬の仲立ちという連想であろう。

一方、和歌も時代が下がるにつれ、両説話を共に踏まえた「鵲」の例が現れてくる。

鵲の雲のかけはしほどやなき夏の夜渡る山の端の月

良経

(秋篠月清集・院第二度百首・夏十五首・826／千五百番歌合・782)

「鵲の雲のかけはし」の良経歌は、次の『後撰集』歌を本歌とする。

鵲の峰飛び越えて鳴きゆけば夏の夜渡る月ぞ隠るる

(後撰集・夏・207／古今六帖・鵲・449／古今六帖・夏の月・288)

この和歌だけでは、なぜ鵲が飛ぶと月が隠れるかがわかりにくいだが、この異文歌である『句題和歌』を見ると、「破鏡」説話に基づいて詠んでいることがわかる。

鵲飛山月曙

鵲の峰飛びこえて鳴きゆけばみやま隠るる月かとぞ見る (句題和歌・風月部・73)

ここでは、鵲が飛ぶ姿を月と詠んでおり、この和歌が「破鏡」説話に基づく表現であることがわかる。よってこの歌を本歌として詠んだ良経の「鵲の雲のかけはし」歌も、「破鏡」説話の影響下にあると言えよう。しかし直接的には、「七夕」伝説の「鵲の橋」の発想の影響を受けている。それは上の句の「鵲の雲のかけはしほどやなき」の「ほどやなき」という表現である。これは、「鵲の橋」がかかる秋の七夕の日まで「ほどやなき」という意である。よってこの和歌も、輔昭の詩句や菅忠貞の詩題と同様に「破鏡」説話と七夕伝説の鵲説話を一首の中に詠み込んでいる。次の和歌も二つの説話を詠み込んでいる。

家十五首歌に、月

為家

天の原光さしそふ鵲の鏡と見ゆる秋の夜の月

(新拾遺集・秋下・421)

この和歌も「月」という題から、七月七日の秋の月という設定を思いつき、「天の原ひかりさしそふ鵲の鏡」と表現している。これも七月七日が半月の頃であり、半月で破鏡説話の鵲鏡という趣向が成り立たせることを眼目とした和歌である。まさに「七夕」伝説の鵲の橋と破鏡説話がとけあって生まれた表現なのである。

以上、『和漢朗詠集』所収詩句から中国著名説話の日本的受容の変遷を見てきた。そこには日本人の美意識の特徴が窺えた。

追記 尚、本稿、第一章に関しては、『韓非子』所収「老馬之智」説話の日本における受容の変遷(『伝承文学研究』第三十八号・平成二年七月)、第二章に関しては「子猷尋戴」説話の日本文学における受容と変遷(『和漢比較文学』第七号・平成三年六月)・第三章に関しては「鵲について―平安詩歌を中心に―」(『札幌大学女子短期大学部紀要』第二十七号・平成八年三月)の拙稿に関連内容がふれてあるので参照されたい。

注

- * 1 引用和歌は、新編国歌大観に従ったが、表記に際して適宜漢字に改めた。歌学書は、『日本歌学大系』所収による。『和漢朗詠集』の古注釈関係は伊藤正義・黒田彰両・三木雅博三氏校注『和漢朗詠集古注釈集成』（大
学堂書店）による。『蒙求』は、池田利夫編『蒙求古註集成上巻』昭和六十三年十一月汲古書院による。
- * 2 『和歌色葉』も同文。
- * 3 拙著『和漢朗詠集』とその受容』（平成十七年・和泉書院）第二章『和漢朗詠集』での利用について―『和
歌童蒙抄』を中心に―』参照。
- * 4 『新撰朗詠集』の詩歌のうち、『和漢朗詠集』所収詩歌を多く本歌本説を用いているという指摘が木村初恵氏
によってなされている。木村初恵氏『新撰朗詠集』の和歌について』（『国文学論叢』第三十四号、平成元
年三月）。
- * 5 『韓非子』『蒙求』『世説新語』『白氏文集』等、本稿における漢籍は、明治書院の新釈漢文大系による。
- * 6 * 3及び、拙稿『和歌童蒙抄』についての一考察―『古注蒙求』との関係―』（『中世文学』第三十五号・
平成二年）参照。
- * 7 柿村重松氏『和漢朗詠集考証』（目黒書店・大正十五年）。
- * 8 『続国訳漢文大系』久保天随氏訳注『李白全詩集』（日本図書センター、昭和五十三年六月）。